

2010 ユニセフ・アンゴラスタディツアーレポート

期間：2010年11月20日～27日

参加者：松本陽子（日本生活協同組合連合会）

三木勉（コアレス会）

宮本浩志（コアレス会）

谷口光（日本ユニセフ協会）

朝倉文恵（日本生活協同組合連合会）

視察地：アンゴラ共和国

首都ルアンダ（6009 小学校）

クネネ州（ナマヤカ小学校、オシカティ小学校、サンタクララ小学校）



11月22日

ナマヤカ小学校（クネネ州、遠隔地）

「ここが学校です」と案内していただいたところは、何もない原っぱでした。ナマヤカ小学校には建物はなく、木陰が教室で、丸太のベンチに座って授業を受けています。今回の視察では、4つの小学校を見ることができましたが、ここは最も都市部から遠い遠隔地に位置します。将来的には、ユニセフの支援で3つの教室がある建物が建つ予定です。

児童数	300 人	現在の教室	木の下
教員数	5 人	トイレ	なし
学年※1	不明	水道	なし
シフト数	2	学校の堀	なし

※1 初等教育が4年間（義務教育）、プレ中等教育が2年間、中等教育が2年間

1975年から先生たちが学校をはじめ、徐々に生徒数が増えていました。6クラスに分かれており、それぞれ違う木陰で授業を受けるそうです。校長先生と、先生が4人、生徒は約300人で、周辺の子どもたちはほとんど通っています。この日は50人くらいの子どもたちが集まってくれました。子どもたちの年齢は幅広く、



木の下の教室

中には19歳の男の子もいました。小さいときには学校に通えなかったそうです。

子どもたちに学校のことを聞くと、「勉強できるのが楽しい」と答えてくれました。ポルトガル語の授業が好きな子が多く、他に算数、科学と言う子どもたちもいました。この地域はコニヤマ語という現地の言葉を使うため、アンゴラの公用語であるポルトガル語を習っています。半数近くの子どもたちは将来、先生になりたいそうです。また、看護士、医者、歌手、パイロットと答えてくれた子どももいました。



インタビューに答えてくれた子どもたち

子どもたちは、朝は3時か4時には起きて、4~5キロ離れたところへ水汲みに行き、家事を手伝ったりしてから学校に来るそうです。この地域では、男の子が家畜の世話をするために学校に通えないことが多い、女の子の方がたくさん通っています。

授業は7:30~10:00と10:00~12:00までですが、季節や天候によって変わります。また、雨季は学校が休みになるそうです。通学は平均で30分くらいかけて、歩いて通っています。

この地域ではHIVの感染率が高く、ライフスキルの一環としてHIVについても教えています。16歳で子どもができた女の子と男の子も学校に通っていました。この二人のように子どもがいながら学校に通っているのは珍しく、子どもができたために、学校に通う年齢だとしても通えない子もいます。



先生



子どもたちの遊び・ダンス



自分の子どもを連れて学校に来ている女の子



子どもたちの年齢は幅広く、19歳の子も

小学校建設予定地

ユニセフは他の支援機関と共に、アンゴラ政府と協力して新しい小学校を 12 校建てるプロジェクトを計画しています。この場所に建つ予定の小学校は、先ほどの小学校より広範囲の子どもたちを対象にしており、中には 2 キロ離れたところから通うことになる子どももいるそうです。こういった僻地の子どもたちも通えるように学校を建てることは、アンゴラ全体に教育を普及させる上で非常に意義があります。



学校建設予定地

ナマヤカ小学校周辺の人々の生活

ナマヤカ小学校周辺の地域では、人々はひとつの一族ごとにまとまって生活しています。家の周囲は高い木の柵で取り囲まれており、私有地を主張すると言うよりむしろ、ライオンやヒョウといった危険な野生動物から身を守る意味もあります。はじめに来訪者用のスペースに案内され、私たちは壁沿いに座りました。家主と面識のない私たちは、まず家主からの距離がもっとも遠い壁沿いに座るのがマナーであり、家主に距離が近い人ほど部屋の中心に座るそうです。こうすることで家主との関係が一目瞭然となります。



一族で暮らす集落

わらで作った大きなかごに保存食として穀物を貯蔵しています。かごは乾燥や虫から穀物を守っています。ここでは、栄養が乏しく乾燥した土地でも育つ穀物を栽培しています。しかし、水害が起こると貯蔵していた作物はなくなってしまい、飢餓が起こってしまいます。この地域では昨年も洪水が起り、ユニセフなどから緊急募金が呼びかけられ追加の支援が行われました。



一家のお母さん

年配のお母さんに家族数を聞いたところ、数字を数えることができなかったため正確な人数はわかりませんでした。

この日家にいたのは女性と子どもたちだけでした。男性は毎日狩りに行くそうです。狩りは弓を使ってウサギやシカを狙いますが、簡単

ではなく、頻繁に捕まえられるわけではありません。鉄砲を使わないのは、不本意なトラブルを避けるためだそうです。水は 3 キロ離れた川や池から汲んできて、タンクに貯蔵しています。トイレはなく、好きなところで用を足すそうです。子どもたちは最初に見学したナマヤカ小学校に通っています。

お母さんは、子どもたちが教育を受けることに理解を示していますが、今後さらに学校が充実することを望んでいると話してくれました。

また、子どもたちは野犬と一緒に寝転がっており、狂犬病の危険性について知識を持っていないことが伺えました。



穀物を貯蔵しているカゴ



高い塀で囲まれた入口の通路



子どもたちの遊ぶ空間



敷地内にある家

アンゴラでは 30 年間続いた内戦が 8 年前（2002 年）に終わったばかりであり、道を走っていると錆びついて放置された戦車をいくつも見かけました。アンゴラは平和が訪れてから本当に間もない、非常に若い国であり、何もかもがスタートしたばかりです。これから発展が期待される半面、内戦によってすべてがなくなってしまい、教育や保健・衛生、インフラ整備等への支援が必要な現状があります。



錆ついた戦車

教育

アンゴラ政府は国家予算の 15%を教育に充てています。（以前は 7%、国際機関等からの支援は除く）。勉強だけでなく、文化や道徳、生活習慣、HIV も含めてきちんと子どもに教えることが重要です。人間づくりの過程において、教育の占める役割は非常に大きいと言えます。全人口の半数以上が 18 歳未満の子どもであるアンゴラにとって、将来の国の発展を考えると、教育の充実は最も優先すべき課題の一つです。しかし現状は教育を担っていく人材が十分に育っておらず、設備も含め環境は整っていません。

また、アンゴラでは手洗い・うがいを徹底させることで防げる病気（例えば、風邪、インフルエンザ、目や皮膚の感染症等）で命を失う子どもも多く、



学校で習ったことを子どもが親に教えることで衛生環境が改善されることも期待されています。正しく手を洗えば、下痢による死を約半分に、風邪をこじらせた肺炎による死を約3分の1減らすことができると言われています。

現在、ユニセフはアンゴラ国内でさらに教育への理解を得て、最終的にアンゴラが自立して教育を推進することを目指しています。ユニセフは、国レベルでは、教育政策（予算、法案等）の充実、州レベルでは先生の育成・研修、地域（日本で言う区市町村）レベルではコミュニティの参加を重視しています。アンゴラ政府や各レベルの担当官と協議を進め、具体的なプロジェクトの実施を計画していきます。

11月23日

オシカティ小学校（クネネ州、農村部）

クネネ州の農村部にあり、全校生徒数は556人、ユニセフの支援で子どもに優しい学校プロジェクトが進められています。

アンゴラでは集落の単位で生活しており、学校を建てたり教育を充実させるためにはまず地域のリーダーと話をする必要があります。この集落では、ユニセフは村長の理解を得て、プロジェクトを進めています。



児童数	556人	現在の教室	非常に粗末な状態
教員数	4人	トイレ	なし
学年※1	幼稚園と1-6年生	水道	なし
シフト数	2交代制	学校の堀	なし
学校長の名前	Herculano Hipuyela	管轄区域	6村

※1 初等教育が4年間（義務教育）、プレ中等教育が2年間、中等教育が2年間

先生

ドミニク先生（30歳、男性、この学校に勤めて2年半）とアンジエリーナ先生（37歳、女性、同4年）にお話を伺いました。

二人は歴史、地理、ポルトガル語、算数、音楽、環境、美術、道徳を教えています。「子どもたちに教えることで集落の状況が改善されるよう役立ちたい。」「子どもたちにも学ぶ権利があり、子どもたちを幸せにしたい。」とおっしゃっていました。

二人とも8年間学校へ通った後、2年間の研修を受けて先生になったそうです。先生になった後も何度も再研修を受けています。

○学校に望むこと

- 様々な問題があるが、特に水道がないことが大きな問題である。先生たち自身も朝早く起きて水を調達してから学校に来る。車で1時間程かかる州都のオンジバまで水を買いに行かなければならぬが、お金がないときは池などから汲んでくる。しかし、そこは豚や牛も浸かつたり水を飲んでいる場所であり非常に不衛生。
- 現在の校舎はわらの屋根と丸太の壁であり穴や隙間がある。雨が降ったら子どもたちは走って校舎から出て行くような状況であり、しっかりした校舎が必要。



先生たち

- ・イスや机がなく、教室が少なく狭いため子どもたちが密集して授業を受けている。
- ・ノートや教科書、クレヨンといった教材が不足している。子どもたちの能力が発揮できるよう教材を充実させたい。
- ・現在二人は集落外から通っているが、地域内に宿舎があるとよい。通勤距離が長いと天候の影響も大きく（悪路のため雨で出勤できないこともある）、何よりも地域に溶け込むことが難しく、集落とのコミュニケーションを充実させる上で問題である。



教室の様子。丸太でできたイスはあるが、机やノートはない

子どもたち

<リーナちゃん 12歳、モデシュトちゃん 10歳、フランキーくん 5歳、シーコくん 11歳、エレーナちゃん 12歳>

好きな教科はそれぞれ<ポルトガル語、環境、歌、算数、算数>だそうです。兄弟は<3人、9人、2人、2人、6人>。将来は先生や医者になりたいと教えてくれました。ほしいものは、本、ノート、紙、鉛筆、色鉛筆、クレヨンなど、勉強に必要なもの、お絵かきできるものです。今はこのような教材がないため、先生の話を座って聞くだけでメモなどをとることができません。それでも、みんな学校が楽しいと話してくれました。



授業風景

6 インタビューの様子

お母さん、お父さん

お母さんたちは、お金がないために教材や制服を用意してあげられないことが気になっているそうです。中には、みすぼらしいといけないからと鳥を売って制服を買ったという方もいました。心配していることとして、先生の数が足りず、今の先生たちが遠くに住んでいること、学校に水道がないため子どもたちが遠くまで水をくみに行かなければならぬことがあります。また、現在はポリオの予防接種しかできておらずコレラ・マラリア・下痢・赤痢等の薬がなかつたり予防策が全くとられていないため、子どもたちの健康が気がかりだということでした。お父さんたちは、サッカーなどスポーツを通した人間育成の充実や、子どもたちがパソコンのような先進技術に触れられる機会があるとありがたいと話していました。

両親は子どもたちが学校に通っていることについて、非常に重要なと思っています。教育が受けられることで職につくことができるなど、より明るい未来が開けてくること、そして子どもたちが家族を支えられるようになることを期待していました。

年配の女性たちは、「私たちには教育の機会がなく、公用語であるポルトガル語すらきちんと話せません。子どもたちが勉強することはとても大切です。」と話してくれました。

学校の建物や運動場、花壇などを作るときには、集落の人たちも協力したいとのことで、学校の運営にとても積極的でした。



村長さん

このように集落の理解があるのは、村長が教育に対して理解を示し、より充実させたいという思いを持っていることが大きく影響しています。村長のエマニュエルさんは、「集落やアンゴラの発展のために教育はなくてはならないもので、これまでこの集落ではきちんとした教育環境が整っていなかつたため、ユニセフの支援を機に充実させられることにとても感謝しています」と話されました。

ユニセフでは、一方的に学校を建てるのではなく、集落や地域のリーダーに話を聞いて教育の重要性を理解してもらい、地域全体で子どもに優しい学校づくりに取り組めるよう支援しています。

校長先生のエルクラノさんは、教育は集落の発展、国家の繁栄のために非常に重要で、教育を受けることで自分を取り巻く環境に気づくことができると言していました。

村長、父母、先生それぞれが教育の重要性を認識し、コミュニティ全体で学校の充実を望んでいることが伺えました。

アンゴラでは一部を除き水道がほとんど整備されておらず、池や沼、川の水が主な生活用水となっています。子どもたちはみんな水汲みが日課となっています。一方、雨季に冠水して、家に住めなくなること



お母さんたち



お父さんと年配の女性



水汲みの様子

もあり、ひどいときは半年間水につかたままの地域もあります。あちらこちらに、仮住まいのトタン板を張り付けた家がありました。

サンタクララ小学校（クネネ州、都市部）

この地域はナミビアとの交流が盛んで、クネネ州の中では比較的発展した都市部になります。現在は古い校舎を使っていますが、今後ユニセフの支援によって6つの教室がある建物ができる予定です。

この学校では周辺住民が勝手に校舎に入って電球などの備品を盗っていくことなどが問題となっており、ユニセフは安全な環境で子どもたちが学べるよう支援していく予定です。子どもたち、先生、PTAの代表、校長先生に話を伺いました。



児童数	2,715人	現在の教室	古い建物とプレハブ
教員数	48人	トイレ	なし
学年※1	1-6年生	水道	なし
シフト数	3交代制	学校の堀	なし

※1 初等教育が4年間（義務教育）、プレ中等教育が2年間、中等教育が2年間

子どもたち

＜エマニュエルくん 11歳、ダディくん 12歳、ペリシダーダちゃん 13歳、ソフィちゃん 12歳＞



学校が楽しいことや、将来の夢を話してくれた子どもたち

学校が楽しいか尋ねたところ、生徒どうし、また先生と生徒の仲が良く、友達や先生に会えるのが楽しい、先生が大好きでいつも手助けをしてくれる、休み時間に友だちと遊ぶことが楽しい、という答えが返ってきました。

好きな科目はそれぞれ＜算数、ポルトガル語、地理、科学＞、将来の夢は＜テレビのジャーナリスト、教育大臣、先生、先生＞だそうです。

どんな学校がいいかという問いには、

- ・ 男女別の清潔なトイレ
- ・ きれいで壊れていない校舎（現在は校舎の窓がわれたり電球が取れていたり、壁がはがれたりしている）
- ・ 壊れていない机やイス（今あるものは壊れていたり、数が足りず家から持ってきてている子どももいる）

る)

- ・ 購買部（お昼を食べられなかつたり家まで帰って食べなければならぬいため）
- ・ きれいな黒板
- ・ 日が沈んでから勉強するための電気

を挙げてくれました。日本では当たり前のようにあるものですが、ここでは整っておらず、子どもたちは安全な環境で安心して勉強できることを望んでいました。

先生

＜マルタ先生（女性）、モニカ先生（女性）、オディーリヤ先生（女性）、アロナンド先生（男性）＞

先生たちは5学年まで修了し、それぞれ専門分野＜地理・歴史、ポルトガル語、算数・物理、地理・歴史＞を持っています。

先生としての思いを伺ったところ、「先生として子どもたちとふれあうことが楽しい」、「勉強を教えることがアンゴラの発展につながると信じている」、「子どもたちの感情的、社会的、学識的な成長を手助けしたい」、「学校は勉強のつながりだけでなく、人と人との助け合いの精神や、生計の立て方も含めた社会に出て行くためのスキルを教えるところです。自分たちが子どもたちを導き、やる気を高めることが責務であり、子どもたちがそれに答えてくれたときはやりがいを感じます。」と話されました。

先生から見た問題点として以下のようなことがあります。ひとつつのクラスの生徒数はひどいときには80人もいて、子どもの数に対して教室が少なく狭いため、木の下で授業をしているクラスもあり、教室の増加を望んでいます。また、生徒によっては5キロ以上離れたところから通っており、途中で幹線道路を渡るため死亡事故も発生しているため、心配しているそうです。他にも、現在は近隣住民が夜に学校に侵入して寝たり、電気などの設備を勝手に持ち帰ったり、授業中に入ってきてウロウロするため勉強に集中できないといったことが起こっています。子どもたちの安全と学べる環境の充実を考えると、周囲に柵を設けたりガードマンを置くことが望まれます。



先生たち（奥の4人）



教室（ときには1クラス80人になることも）

PTAの代表

＜マルクスさん＞

PTAでは、毎週先生や生徒から問題だと思っていることを聞き、改善に努めています。例えば、学校から電球などを持ち帰る住民に対しては、自分たちの子どもから電気を奪っているということをわかってもらうよう地域に働きかけています。また、先生の中には、試験に合格させるためにお金を要求することがあり、貧しい家の子どもはお金が払えないため、家の収入によって成績に不平等が生じることになってしまいます。そういうことが起こらないようPTAとして注意を払っています。このような問題は、アンゴラ全体で先生の給与が高くないことが根本的な



電球があったが、近隣住民が持つて行ってしまった

原因となっており、先生の待遇改善が必要です。

気になっていることとして、雨季にはほとんどの子どもが学校に来られないため授業ができないこと、トイレがなく茂みで用を足していること、水道がないことなどがあります。の中でも重要なのが、先生からも話があった、幹線道路を渡っての通学です。この地域には学校が一つしかありませんが、児童数を考えると複数校の検討も必要であり、仮に学校が一つのままだとすれば、道の向こう側に建てることも考えなければなりません。

ユニセフでは、地域の教育課を通じて学校や地域と話し合い、どのような方法で支援を行うかを検討します。



クネネ州の3つの小学校では、子どもたちや先生、両親、コミュニティの代表の方々からお話をうかがうことができました。共通して、子どもたちが安心して学校に通い、充実した教育を受けられることを望んでいました。また、ユニセフでは学校を建てるだけでなく、地域全体を巻き込んだ支援を重視していること、それによって地域に教育への理解が広がっていることがわりました。

11月25日

6009校（首都ルアンダ）

首都ルアンダにある小学校で、日本政府、ユニセフ、アンゴラ政府の3者が支援して、1年半前（2009年）に新校舎がつくられました。日本政府は建物、ユニセフは水道・トイレ、アンゴラ政府は教材を支援しました。



児童数	1,500人	現在の教室	新しい建物 12教室
教員数	40人	トイレ	あり（男女別2ヶ所）

学年※1	不明	水道	あり（2ヶ所）
シフト数	2交代制	学校の堀	あり

※1 初等教育が4年間（義務教育）、プレ中等教育が2年間、中等教育が2年間



男女別の水洗トイレ



水道

学校には生徒用トイレが2ヶ所、職員用トイレが1ヶ所があり、どちらも男女に分かれています。水道をひねると水が出てくる手洗い場が2ヶ所あります。

支援によって去年新しい建物ができ、教室は12部屋あります。旧校舎も脇に残っています。ひとつの教室に40名分の机・イス、黒板がそろっていますが、政府の方針として一クラス35名を目指しており、さらなる改善を目指します。

手洗い、洗面所を含め校舎の壁等に、手洗いを推奨し衛生管理をよびかけるポスターが掲示されており、子どもが学んでそれを親に伝えています。この地区では戦後、人々が好き勝手に家を立てて住むようになったため、自治を行うコミュニティの形成がうまくいっておらず、学校を建てるこことにより、学校から地域へ衛生管理の推進等が発信されています。一例として、2006年にコレラが大流行しましたが、水1リットルにどれくらいの浄水剤を入れるかを図示したポスターが掲示されており、子どもたちだけでなく地域にも情報提供しています。その結果、今年の発生は20件と以前より激減してきています。

これまでユニセフ、日本政府、アンゴラ政府が協力して支援してきましたが、この日、コミュニティに運営を含めて学校を引き渡すセレモニーを開催し、今後の学校運営、管理に関してはコミュニティが全責任を持って行なうことが正式に発表されました。このセレモニーでは、コミュニティの長であるキンバキアシ区の区長さんから、各支援機関への感謝の意と、今後施設を大切に使っていくことを約束する挨拶がありました。



手洗いなどをよびかける壁の絵



コミュニティに運営を引き渡すセレモニー



コレラを防ぐために、消毒液の作り方を示したポスター



アンゴラでは、約 100 万人の子どもたちが学校に通えていないと言われています。また、一人の先生が受け持つ生徒数の平均は 70 人にも上ります。首都のルアンダでも、木の下で授業を行うところもあり、空き部屋やテントなども活用して教室に充てていますが、それでも間に合わないのが現状です。小学校の男女の比率は、男の子が 100% に対して女の子が 98% とほぼ同じですが、中学校になると男の子 100% に対して、女の子は 35% と激減します。これは、特に女の子は思春期に近づくと、トイレがなくその辺で用を足したり、男女一緒であることを気にすることが、一因となっています。



ユニセフは、人材育成に最も力を注いでいます。内戦中は約 30% の子どもたちしか学校に通えず、2 世代、3 世代に渡って教育の空白期間があります。<学校に通えず勉強できない→職に就けない→貧困から抜け出せない→学校に通えない>という負の連鎖を断ち切ることが、アンゴラの発展にとって非常に重要です。

ユニセフアンゴラ事務所では、具体的に 5 つの改善すべき課題を掲げ、取り組んでいます。

- ① 学校に通いやすい状況にすること（教室、先生を増やす）
- ② 教育の質（校舎、先生の能力、水と衛生、環境）
- ③ 先生の研修、既存の先生のトレーニング、カリキュラムやマニュアルの充実
- ④ コミュニティの参加（教育の重要性を認識し教育に関わり、PTA などを組織する）
- ⑤ 学費が払えない世帯へのサポート

今回の視察では、地方のクネネ州の遠隔地・農村部・都市部、そして首都ルアンダの学校を視察しました。

アンゴラは石油やダイヤモンドの産出により経済発展が目覚しく、一人当たりの GDP の平均年間成長率は 3.4% (1990-2008) に上ります（世界子供白書 2010）。首都ルアンダには高層ビルが次々と建設され、海辺にはクルーザーが浮かんでいました。しかし、一方、農村部では水道も電気もなく、人々は弓で狩りをし、雨季には飢餓が起こるという生活をしています。ルアンダと地方の格差は、ルアンダをはじめ北部で石油が採れること、クネ



ネ州の位置する南部には地雷が多く残っていたり、武装抵抗組織/政党の活動拠点であったこともあり資源開発や整備が遅れていることが主な要因です。また、農村部の中でも、今回視察した3つの地域のように、経済的に豊かなところとそうでないところでは格差があります。一方、ルアンダの中でも、豊かな生活をしている人はほんの一部で、ほとんどの人は狭く不衛生で電気や水道のない家に暮らしています。今回視察した6009校のようなところばかりではなく、木の下で授業を行っている小学校もあります。

アンゴラの経済発展だけに目を向けていると、今回わかったような教育や保健・衛生の課題は見えてきません。今回の視察では、地域ごとに課題があり、教育環境が不十分な現状と、地域全体の教育や保健衛生分野の改善の必要性を確認することができました。



その他メモ：アンゴラについて

- ・ アンゴラでは、お金持ちは国民のわずか5%であり、残りの95%は貧しい人々です。また、54%の人々は1日1.25ドル以下で生活している非常に貧しい人たちです。首都ルアンダは世界一物価が高いと言われていますが、仕事を求めて国民の3分の1近くが集まっていると言われています。しかし物価の高さに対して収入は少なく、その日暮らしの生活をしている人がほとんどです。お金持ちは経済と貧しい人の経済の二つが並存しているとも言われていますが、貧しい人も同じ物価でモノを買っているのが現状のようです。
- ・ 自給率は場所によって異なりますが、地域でできた作物は地域で消費されます。運搬のお金がかかるため広い範囲での食べ物・食材の行き来はありません。普段の食べ物として、主食はキャッサバのようなものとコーンをまぜて粘土状にした‘フンジ’というもので、日本でいうお米のようなものです。おなかは膨れますがあまりありません。地域によっては肉や魚、野菜も食べますが、フンジに比べるとごく微量です。肉や野菜は少なく、沿岸部や内陸といった地域ごとに食材が偏っているため、多くの子どもが栄養不良に陥っています。
- ・ クネネ州の州都オンジバは、隣国のナミビアと物々交換をしています。例えば、こちらから牛肉と牛乳を持って行き、穀物等と換えます。
- ・ オンジバは洪水と旱魃がたびたび起こる地域で、雨季には冠水して今ある家に住むことができなくなることもあります。
- ・ アンゴラは交通事故で命を失う率が世界一といわれています。マナーが悪く、割り込み等は当たり前に行われます。また、信号や車線はほとんど整備されていません。首都のルアンダでは朝の交通渋滞が激しく、通常20分で行けるところが2時間以上かかることもあります（雨が降ったら5時間）。そのため現地のユニセフスタッフの中には、朝の3時や4時に家を出て、事務所に通う人もいます。
- ・ アンゴラでは支援プログラムのスケジュールがなかなか決まりません。政府と会議をするが、具体的に進まず、辛抱強く行う必要があります。